

「改ざん 気にするな」

看護師長の抵抗無視

上には絶対服従の空気

女子医大・瀬尾容疑者

東京女子医大病院(東京都新宿区)で心臓手術を受けた小学六年生の平柳明香さん(当時十二歳)が亡くなった医療過誤事件で二十八日、医師らが記録を改ざんしてまで医療ミスを隠し通そうとしていた実態が浮かび上がった。捜査員からは「上司には絶対服従という、いびつな関係が隠れている背景にあるのではないか」との指摘も出ている。医師一人の逮捕という事態を受けた同病院の記者会見では、幹部が頭を下げる場面は最後まで見られず、謝罪の言葉が空虚に響いた。

〈本文記事一面〉



会員の眞頭、ペーパーに目を落とす眞頭み上げる林直院院長(右)と東間副院長

「教授を頂点とするピラミッドの組織で、上の指示には絶対服従という雰囲気があった」。警視庁の参考人聴取に依じた病院関係者の一人は、東京女子医大病院の組織や人間関係な

も、手術を総括する立場だった同病院講師の瀬尾和宏容疑者(46)から見れば部下に過ぎない。看護師長が何度も、そして執拗に抵抗したにもかかわらず、「おれが言ってるんだから気にするな」という看護記録の改ざんの指示も、組織的な背景事情があったの、と見られる。

一方、同病院は、高度な医療技術を持つ病院に對し厚生労働相が承認する「特定機能病院」で、厚生労働省の社会保険審議会医療分科会も明香さんの死に事故問題を受けて、林直院・同病院長ら幹部から独自に事情を聞いた。

病院責任にはあいまいな答え 院長 会見

東京女子医大病院は、千八百午後三時半から、林院長ら幹部が記者会見を開き、「特定機能病院」二時與二面への承認を厚生労働省に自主的に返上する意向を明らかにした。しかし、不祥事の隠れ体質や病院としての責任を問う報道陣の質問には、終始あいまいな言葉を繰り返すばかりで、約一時間に及ぶ会見の間、頭を下げる場面はなかった。

「病院側は把握していないか」と問われると、東間副院長が「記録が訂正されていたことは確認したが、(瀬尾容疑者が)指示して書き換えさせたかは聞いていない」と述べた。

でも大きな責任があると思ふ」と述べた。病院の体制や人事の刷新については「私の去就についてはコメントできない。改革に取り組んでいる最中なので」と言葉を濁した。

特定機能病院の承認取り消しも、林院長が特定機能病院の承認について自主的な返上を表明したことを受け、大谷泰夫・厚生労働省医政局総務課長は急ぎの会見し、「私どもも、たった今(病院側)に電話をかけて確認したばかり」と、あせんとした様子。この日午前、林院長らが厚生労働省に謝罪に訪れた際にも、特定機能病院の承認返上の話は出なかったといい、「行政処分として承認を取り消すという選択の余地もある」と、不快感をあらわにした。これまで承

冒頭、林院長は報道陣約七十人を前に用意したA4判三枚のペーパーを手元に「痛恨の極み。社会的責任を痛感しており、すべての患者、家族におわび申し上げます」「亡くなられた患者様のいみじい悔を心よりお祈り申し上げます」と淡々と読み上げた。

看護記録の改ざんなど同病院講師、瀬尾容疑者による管理責任として、組織とし